

パソコンによる自習補習用教材ソフト

—動詞の活用編—

浅田まり

CAI教材・自習補習用・動詞の活用・効率的・個別学習

1. はじめに

日本の国際交流の進展に伴い、国内外での日本語学習熱が高まっている。また一方では学習目的や学習者の背景・日本語習得レベル・年齢など学習者の多様化が進行している。国内でのそのような多様化したニーズに対応し、また国外での教師不足や学習の場の不足を補うためには個別学習ができるような教材が必要となってきた。

日本語教育で利用される文字や絵や写真・ビデオなどの教材は全てパソコンに取り込むことができる。また教科書等による自習では不可能だった学習者側からの応答に答えることも可能である。そういった意味で学習者が自分で進めていく日本語学習を可能にするためにはマルチメディア教材の開発が不可欠である。

本稿では、このようなニーズに応えるため開発した「パソコンによる日本語学習の自習・補習用教材：動詞の活用編」について、その目的と構成・内容・特徴等について述べる。

2. CAI教材について

日本語教育のマルチメディア教材を開発するためには当然のことながら日本語教師が中心となる必要があるが、これまでの教科書作成等との大きな違いは、パソコンのプログラミングというのが教師の片手間では到底不可能であるということである。学習内容の重要さもさることながら、いかにその内容をパソコンに伝え、分かりやすく、使いやすく教材化するかということになるとかなりのプログラム能力が不可欠となる。

市販の日本語教育のCAI教材では企業が開発の中心となっている場合が多いため、必ずしも日本語教育関係者が密接に制作にかかわっているとはいえない。その結果、内容的に不適切なものがあったり、様々なレベルで扱う内容が混在していたり、教科書と同様の内容をコンピューターに提示させただけのような教材もみられる。

日本語教育用のCAI教材で現在市販されているものはまださほど多くはない。

凡人社(1998)¹⁾によると、語彙・かな及び漢字教育に関するものが17種類、会話を中心としたものが9種類市販されている。文法学習に関しては、会話教材の中に文法事項を扱っているものもあるが添え物的扱いのものが多く、わずかに『日本語実践』のGrammar notesで文法事項を解説する項目を設けているぐらいである。ただし、『日本語実践』では非常に活字による説明が多く、教科書を電子化したという印象を受ける。

一方かなりの数の大学の研究機関ではそれぞれにパソコンをつかった教材が開発されてきている。

名古屋大学言語文化部では初級教科書『A Course in Modern Japanese』全24巻に提出されている文法項目を練習するためのプログラムが15年近くも以前に作られ、これがC A I教材実用化の最初とされている。この教材は現在も有効で近く製品化される予定である。製作者の一人、深尾百合子氏から頂いたコメント²⁾によると「名大の文法プログラムは、使用している教科書に沿って、各課独立構成になっていて、問題形式も多様である。問題文の入れ換えも可能であるが、簡単ではない。(例えば、活用問題の動詞などの入れ換え)そのため、他の教科書を使っている教育機関では使いにくい。15年くらい前のものであるため、静止画面しか使われていない(キーボードとリターンキーだけ使用し、アニメのように動くことはない)が、文法のチェックには今でも十分に機能していて、日本語教育支援手段としては非常に有効である。」とのことである。

岩手大学工学部情報工学科では三輪謙二助教授を中心としてオンデマンド・ネットワーク独習者用対話型日本語音声教育システムが開発され、インターネット上で公開されている。この教材は外国人のための音声の聴き取りクイズを用いた日本語音声教育システムで、学習者が聴き取った音声(日本語の単音節、単語、文章)を五十音表からマウスで選択あるいはローマ字またはひらがなで日本語を直接キーボードから入力して日本語音声の聴き取り練習ができるようになっている。この研究では、「学生ばかりでなく、職業を持つ社会人もいつでも利用できるようにするため、時間に束縛されない仮想学校(バーチャルスクール)が必要である」三輪(1998)³⁾とし、マルチメディア教材やインターネットを利用した日本語教育の重要性が言われている。

広島大学では水町伊佐男氏がひらがな簡易入力システム及び動詞活用練習プログラムを開発している。前者は漢字の読み方や受給動詞の練習等が取り上げられている(水町、1992)。後者は1日本語動詞につき18種類の動詞句を学習するものである。ローマ字とひらがなによる解答ができる。ローマ字による解答では、動詞句の一部(活用変化部分)をキーボードから入力し、ひらがなによる解答では画面にあらわれる複数のひらがな文字についての番号を入力して解

答するものである⁴。このプログラムでは学習者の氏名登録や学習結果表示も行える。

また、日本語教育学会マルチメディア教材研究委員会では文化庁の委嘱により、日本語マルチメディア教材開発の2年目に入り、中・上級日本語学習のための教材を開発している。この教材には自作映像素材が収録してあり、その場面を使って教師側が自由に問題を作ることが可能となっている。4択の選択枝や画像・音声・文字によるヒント等も自由に換えることができる。

さらに、パデュー大学における日本語プロジェクトでは、深田淳氏らを中心として、ひらがな・カタカナの練習・助数詞の練習・単語・漢字・活用の練習等がインターネット上で公開され、また筑波大学との共同プロジェクトとして読解支援システムも開発されている。

東北大学では才田いずみ氏が中心となって電子メールを利用した日本語学習の研究—コンピュータ通信によるコミュニケーション型日本語学習支援システムの研究—がメルボルン大学の上級日本語クラスとの間で行われている。(才田、1997)

このように近年、CAI教材の研究が急激に進められてきている。しかし、大学等で開発されている教材は、各機関で使用している教科書等に対応している場合が多く、深尾氏も述べているように他の機関では使いにくい場合がある。そこで最近の傾向としては、日本語教育学会マルチメディア教材研究委員会や筑波大学の試みのように、固定化した内容ではなく、使用する側にあわせて内容を書き換えられるようなソフトも開発されてきている。

また、ここ数年のコンピュータ技術の進歩には目を見張るものがあり、静止面だけでなく、動画や音声等も比較的簡単に利用出来るようになった。また、簡単にCD-ROMへの焼き付けができるようになったことによって、これら大容量のファイルも扱うことが可能になった。

本教材でも、学習者の理解を助けるため、グラフィックスをかなり使用し、又語学教育に不可欠の音声も自然な音で十分に学習者に聞かせることができるように作られている。さらに新しい試みとして、既習教科書と既習課を設定することで、学習者の既習語彙に合わせた学習ができるような方法をとった。また、一つの動詞をいくつかのパーツに分割したデータベースを作成し、プログラム上で規則性をもたせた動詞を使えるような工夫をした。

3. 本教材の理念と目的

CAI教材と言っても、パソコン上で利用するという媒体の違いこそあれ、教材には変わりがないのであるから、他の教材と同様に、はっきりした指導理念と

目的をもっていなければならない。市販のマルチメディア教材の中にはこの部分が漠然としているものも多く、効果音や画面デザイン等、学習と直接関係しない部分に凝りすぎていて有用でないものが目に付く。

本教材ではそういった反省のもとに、特に理念と目的をはっきりさせて制作に当たった。本教材の基本的な考え方は直接法である。内容や構成を考える際に、常に直接法の文法積み上げ方式の授業をイメージした。教室で教師が媒介語を用いずに教えるのに近い学習形態を想定し、その上で、パソコンの持つ特性を十分に生かせるよう工夫した。直接法の長所をいかしつつ、テキストを使った学習や一斉授業では困難なことが、パソコンの利便性を使って可能になっている。

外国語を学習する際、学習者の第一言語である母語はそれぞれ異なったシステムを持っているので、媒介言語に頼るのではなく、日本語を日本語として教えていく直接法は効果的である。しかし、中・上級と違い、初級の学習者に対して、直接法で教えるためには教材の準備・導入・説明の仕方等にかかなりの工夫が必要とされ、教師の側の指示の言葉や説明のしかた、キューの言葉の選択等にかかなりのコントロールが必要である。そのため、ある程度ベテランの教師でなければこれを行うことは難しい。

任都栗(1997)も現在の日本語教育の問題点として「これまでの教え方・教材の工夫の蓄積が次世代にいかされていかないという点」を指摘し、「それぞれの教師が日々工夫して作成した教材、その教材を利用しての教え方、またその教育効果等の情報はだいたいの場合その教師個人あるいはその機関内にとどまっていることが多い」(p.89)と述べている。

同じような教材をそれぞれの教師が日々準備することに費やされる時間は膨大なものである。それらを共通財産とすることができないのは残念なことである。

日本語教育の現状はというと、国内の日本語教育、特に日本語学校等では、直接法でしか授業を行うことができないという環境も存在する。これらの学校では学習者の母語が多岐に渡るため、一つのクラスに同じ言語を母語とする学習者だけがいることはまれで、様々な母語を持つ学習者が混在して授業が行われることが一般的である。共通の媒介語として英語が使える場合はよいが、多くの場合、英語を理解しないアジア系の学習者がクラスの中で多数を占めている。そのため、媒介語は使いたくても使うことができない場合が多い。

一方大学では媒介語として英語を用いて行われる日本語の授業も多々行われている。この場合、学習者の英語力が一定のレベルを超えている場合は問題は少ないと思われるが、実際には漢字圏、特に中国等からの留学生の多い大学では、媒介語の使用が英語の苦手な学習者にとって、不利になっている場合も多い。

このようなことを考えた結果、本教材では基本的には媒介語によらない理解を

目指して学習内容を組み立て、画面構成を工夫した。その上で直接法の補助として媒介語説明を加えてある。

また、語学の学習というのは、ただ理解するだけでなく、トライアンドエラーを繰り返して体得しなければ意味がないものである。従って、その学習ペースは個々の学習者にあわせたものでなければならないと考える。現状では時間的・人的余裕のなさからそのような個別の指導をすることができないばかりか、学生の人数的問題から、一クラス中の学習者の日本語レベルにすらかなりの幅があるのが実状である。こうした場合に、一斉授業を補う練習が各個人のペースでできる教材があれば多くの学習者にとっても福音になろう。

教師による一斉授業はまた、教師の熟練度・準備に要する多大な負担・学習者の多様性への対応・時間的拘束等の問題を抱えている。パソコンの利便性はこれら全てにわたって、問題を軽減することができる。

CAI教材には共通して

- (1) 自由な時間に学習することができる。
- (2) 練習やテストの結果を瞬時に表示できる。

といった利点があるが、そのような点に加えて本教材では具体的に以下のようなことが可能になっている。

- (3) 理解の曖昧な点を画面ごとに表示される英語・中国語・韓国語(事前設定により切り替え)による解説によって補える。
- (4) 誰が指導しても、あるいは指導しなくても適切な説明・練習ができる。
- (5) 音声を何度でも聞くことができる。
- (6) 学習者の納得のいくまで何度でも練習問題を提示することができる。
- (7) 復習が必要な個所の判断とその項目へのジャンプができる。
- (8) 個々の学習者に合わせた既習語彙を使って練習することができる。

多くの日本語教師はよりよい教材で十分な準備のもとに授業に臨みたいという気持ちを持っているが、その余裕と時間のなさに苦しんでいるといえるだろう。機械にできること、機械にしか出来ないことをパソコンに任せることによって、教師の準備をより意義のあることにあてられ、また学習者は教師との貴重な学習時間をより効率的に有効利用することができるようになる。

教室活動のように導入がなされ、ベテラン教師が準備した教材のように練習ができ、必要に応じて媒介語の説明が見られ、かつ、学習者の個々のレベルやスピードに合わせて練習ができる効率的な教材を作るのが、この教材開発の目的である。本教材の目的・対象及び動作環境をまとめると以下のようなになる

[目的]

- (1) 日本語教育の一斉授業を継続的に受けられない学習者の自学自習用

- (2) 一斉授業の個別補習用
- (3) 日本語教育の専門家ではない教師が指導する場合の補助教材
- (4) ボランティアによる日本語教室や小中学校などで、教師の補助として使用することによる教師不足への対応。

[対象]

対象とする学習者の年齢は年少者（小学生程度）から大人までを幅広く想定した。特にパソコンが使える環境にある留学生・ビジネスマン等に役立つと考える。

日本語の専門家でない教師が教える場合には指導のための補助として役立つことが期待できる。

現在のところ、日本国内の日本語学習者対象であるが、パソコン機器の面での環境設定が整えば、将来海外でも使用可能にしたいと考えている。

[動作環境]

必要機器構成： Windows95 が動作する機種

CD-ROM ドライブ：要

ディスプレイ解像度： 800×600(小さいフォント)以上推奨

サウンド出力機能：PCM44.1KHz が再生できるもの

ハードディスク空容：最低 37MB

メモリ容量：16MB 以上(32MB 推奨)

対応OS： Windows95

4. 構成

4. 1 設定画面【画面B】

本教材では以下の5項目について、個々に設定することができる。

- (1) 既習教科書：以下の教科書の中から学習者がそれまでに学習したことのある教科書名を選択する。以下に名前がない場合あるいは教科書で学習していない場合は『その他・なし』を選ぶ。
『新日本語の基礎Ⅰ』『新日本語の基礎Ⅱ』『日本語初歩』『An Introduction to Modern Japanese』『日本語(にほんご・にっぽんご)』『その他・なし』
- (2) 既習課：上記の教科書で何課まで学習済かを設定する。確認・練習に使用する動詞は、各学習者の既習教科書・既習課の設定により、既習語彙を使つての練習ができる。『その他・なし』を選択した学習者には日本語能力試験出題基準3・4級の動詞から出題される。
- (3) 画面上の表示文字：学習者によって、各画面での表示文字をひらがな表示

とローマ字表示のどちらかから選択することができる。

- (4) 媒介語：媒介語による解説・動詞・指示用語等の訳で使用する言語を英語・中国語・韓国語から選択できる。
- (5) 入力方法：練習やテストで解答する際に、文字をキーボードから直接入力するか、あるいは画面上の五十音表をクリックするかの入力方法を選択する。

4. 2 学習項目の構成

以下の学習項目について活用形⁵の作り方を提示し、使えるように練習する。日本語教育では動詞はまず「ます形」を教えることが多いので活用形は原則として「ます形」から導入する方法をとった⁶。

4. 2. 1 学習項目【画面A】

- ① [ます形]：動詞を「ます形」で提示する
- ② [ていねい体]：動詞を～ます／ません／ました／ませんでした の4つの形に変換する練習及び丁寧体での質問に対する答え方の練習
- ③ 動詞の [グループ分け] の仕方とその練習
- ④ [辞書形] の作り方と練習・応用練習
- ⑤ [て形] の作り方と練習・応用練習
- ⑥ [た形] の作り方と練習・応用練習
- ⑦ [ない形] の作り方と練習・応用練習
- ⑧ [ふつう体] のまとめ
- ⑨ [命令形]⁷の作り方と練習・応用練習
- ⑩ [意志形]⁸の作り方と練習・応用練習
- ⑪ 全活用形のまとめ⁹

4. 2. 2 各学習項目の内容構成

活用形についての各学習項目（4. 2. 1の④・⑤・⑥・⑦・⑨・⑩）は、アピール画面→プレースメントテスト→説明（活用形の作り方）→確認（口馴らし）→練習（文字入力）→終了テスト（活用形の定着の確認）→使ってみよう（文型としての応用）で、構成されている。その他（①・②・③・⑧・⑪）の学習項目に関してはこの限りではない。

(1) アピール画面【画面C】

どのようなことを各学習項目で学習するかを学習者に理解させる。アニメーション又は絵と文字で、使う場面のイメージを与え、母語による解説で理解を補う。

(2) プレースメントテスト

自習コースでは、学習者は日本語学習暦なしとみなされ、最初から順に学習していくので、プレースメントテストは自動的に飛ばされる。

復習コースを選択した場合は、各項目の最初(①・⑩を除く)にプレースメントテスト(20問)があり、自動的に合否判定がなされる。この合否判定は原則として、17問以上の正答で合格である。学習の効率化を図るため、合格した場合は、当該項目は学習不要として飛ばされる。しかし、項目全体では合格しても、さらに細かい判定がなされ(例-1・2・3グループ別等)【画面H】、部分的に不合格の場合はその部分のみの学習へ進む。

(3) 説明画面【画面D】

各活用形の作り方等の説明を画面上の文字の動き、文字の強調、音声などによって、理解させる。媒介語による解説付。

(4) 確認画面【画面E】

いわゆる「口馴らし」に相当する。説明画面で理解したことを実際に口に出して発音してみることを目的としている。何度でも練習でき、正答を文字表示と音声で確認することができる。(5問単位)

(5) 練習画面【画面F】

活用形の変化を実際に表記する練習画面。キーボード入力あるいは五十音表からの入力で解答を画面上に記入し、即時正誤判定がなされる。結果は10問ごとに一覧表示と結果表示バー【画面G】でみることが出来、誤答分については、やり直し練習が結果表示の次に自動的に出題され、再度解答するように設定されている。(10問単位)

(6) 終了テスト

プレースメントテストと基本的には同様のテストで、定着の度合いを計る。判定で不合格となった場合はその部分の学習へ戻る。合格の場合は次の項目へ進む。練習と同様、即時正誤判定が確認でき、その後結果の一覧表示と細かい判定【画面H】もなされる。

(7) 使いましょう【画面I】

この教材は基本的な活用練習のためのものであるが、活用ができて、それを使えないのでは学習意欲を欠くことになると考え、各項目ごとに、その活用を使った文型を1~2、応用練習として付け加えた。例)「て形」応用練習として、「～ています(進行形)」・「～てください(依頼表現)」

5. 表示

5. 1. 1 文字表示

画面の表示はすべてひらがな（あるいはローマ字）が使われ、文法用語やドリルの内容については媒介語による説明もなされる。タイトル・指示・各動詞はマウスポインタ（画面の矢印マーク）を約 1 秒間単語の上で停止させることにより、媒介語の訳がでる。動詞についてはさらに、日本語能力試験 3・4 級に対応する漢字がポインタの移動により表記される。【画面 E・F 参照】

間違いやすいところ、覚えなければならないところ、例外等には、色変え等の強調表示を用いた。また中心となる本画面以外に、必要に応じて、ヘルプで文法用語等の母語解説を見ることがもできる。

5. 1. 2 絵・音声表示・マーク・ボタン

アピール画面や説明画面・応用画面では適宜実際の場面をイメージできるような絵やアニメーションを用いて学習を助けている。また、説明画面では文字の表示の変化に従って音声が発音されたり、文字の色が変化したりすることによって、理解を助ける工夫がなされている。

また、各所についている [スピーカーマーク]（【画面 E 参照】）をクリックすれば五十音・動詞・正答等の音声を何度でも聞くことができる。

また、学習を楽しく、分かりやすくするために、視覚に訴える各種のマークを採用した。正答・誤答・合格・不合格・スピーカー・発話の各マークである。【画面 E・G・H 参照】

発話マークは確認画面等についており、このマークのところで学習者の答えの発話を促すものである。

[もう一度] ボタン：説明・確認・練習の各画面とも、このボタンをクリックすることにより、学習者が納得するまで何度でも説明を見たり、問題を繰り返すことができる。

5. 2 動詞について

5. 2. 1 動詞のデータベースの作成

各練習・テストに使用する動詞については、4. 1(1) の教科書及び日本語能力試験出題基準 3. 4 級の動詞のデータベースを作成した。これにはあらゆる活用形を作るための動詞のパーツのほか、各国語訳・掲載教科書名・初出課等 40 以上の項目が各動詞ごとに入力されている。全動詞数は 488 である。

5. 2. 2 動詞のコード分け

問題によってそれぞれ適切な動詞を出題するために、活用形の作り方に応じて、それぞれの例外も含めて 1 グループ動詞を 10 個、2 グループ動詞を 3 個、3 グ

ループの動詞を4個の計17個のコードに分類し、テスト・確認・練習問題に出題する動詞はコードによって指定した。コード分けの基準は以下の通り。

- 1 グループ：「ます」の前の文字が「い」「り」「ち」「み」「び」「に」「き」「ぎ」「し」と「行くーて形例外」の10コード
- 2 グループ：「ます」の前が「e」「i」の動詞と「かな一字ーいます等」の3コード
- 3 グループ：「します」「来ます」「名詞+しますー勉強します等」「て形+来ますー持ってきます等」の4コード

さらに、動詞によっては、意志形や命令形等で使えないものもあるので、そういう動詞は活用形ごとに問題として提示されないようにチェック項目を設けて排除した。

このように出題する動詞を特定せず、コードによって指定することで、各場面に応じてパソコンが動詞を自動的に、指定された配分で選び出すようになった。確認・練習ではそれぞれ、一度に5又は10問の動詞が出題されるが、学習者がさらに多くの練習を希望する場合は、自動的に同じ配分で、違った動詞の問題を何度でも出題することができる。これはプレースメント及び終了テストでも同様に、テストの都度同じ順序で同じ動詞問題が出題されることはない。このことが本教材のもっと特徴的なことである。

このように問題や答えとして画面上に表示される動詞があらかじめ決められていないので、それらはプログラムの指示によって多くの動詞の中から呼び出してこななければならない。

しかし、およそ500の動詞の活用形を、画面上に呼び出す様々な形のままデータにしておくと膨大な量になってしまう。

それを避けるために「ます形」をベースに動詞を分割し、プログラム上で結合させて変化した種々の形を出力する方法をとった。しかし、このように数字ではない言葉としての動詞に規則性を持たせ、プログラムで条件にあったものを選び出し、しかも例外なく使用できるようにすることは大変困難なことであった。どのような形で動詞を分割するかといった問題で様々な試行錯誤を繰り返し、多くのアイデアを出しあった末、独自の方法で動詞を分割しデータベース化することに成功した。

6. 終わりに

この教材は「コンピュータ倶楽部π」との共同制作である。マルチメディア教材を作成するに当たってはその学習内容が重要なことは言うまでもないが、他の教材と違い、日本語教育関係者が少しパソコンのプログラミングを勉強した程度

ではパソコンの利便性をフルに生かした教材を作ることは不可能である。また、逆にプログラミングに精通しているからといって、即日本語教育教材の設計や開発が出来るわけでもない。この両者が組んで開発に当たる場合、その意思の疎通にはかなりのハードルがある。今回の教材作成に当たってもそういう問題が多々あった。両者にお互いの領域でのある程度の知識や経験があればよいが、そうでない状況では日本語教師側がかなり明確な仕様を出し、プログラマーの側も可能なこと・不可能なことやどういう情報が必要かということを具体的に根気よく伝える努力が必要である。深田(1992)にもこの両者の間に「相当なパーセプションギャップがあることをよく認識し、慎重に意思伝達をする必要がある。従ってCAIの経験のないプログラマーとコンピューターに関する知識の乏しい語学教師が組むというのは、かなりの危険を伴う」(p.48)と書いている。今回の教材作成では、「コンピュータ倶楽部π」のメンバーの中に日本語教育の経験者がおり、両者をつなぐ役割を担ってくれたことが幸いした。さらに綿密な打ち合わせと頻繁な電子メールとファックスの駆使と、何よりも全メンバーの教材作成への旺盛な意欲によりチームワークを発揮することができた。

本教材ソフトは近い将来CD-ROMの形にして製品化される予定である。本教材開発のメンバーとその分担は以下の通りである。

日本語教育内容責任者：浅田 まり
システム開発 責任者：松本 記代子

システム設計・プログラム担当：松本記代子（「コンピュータ倶楽部π」代表）
日本語教育内容・タスク担当：浅田 まり
日本語教育内容・プログラム補助及び中国語担当：志垣裕子（π）
プログラム補助・グラフィックス及び英語担当：矢切素子（π）
プログラム補助・韓国語担当：宇津照美（π）
プログラム補助・音声担当：渡辺真智子（π）
ヘルプファイル作成・英訳・及びデータ入力担当：上田令子（π）
ヘルプファイル作成・英訳・及びデータ入力担当：恩塚憲子（π）
ヘルプファイル作成・英訳・及びデータ入力担当：塩崎真樹子（π）

参考文献

- (1) 大坪一夫 (1992) 「日本語教育でのコンピュータ利用の過去、現在と未来」『日本語教育』78号日本語教育学会
- (2) 草薙 裕 (1992) 「日本語教育におけるCAI」『日本語教育』78号

日本語教育学会

- (3) 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験出題基準』 凡人社
- (4) 才田いずみ (1997) 「電子メールを利用した日本語教育」 『日本語学』 Vol. 16-5 明治書院
- (5) 任都栗 新 (1997) 「マルチメディア教材の開発と連携」 『日本語学』 Vol.16-5 pp.87-93
- (6) 日本語教育学会 (1998) 『マルチメディア日本語教材に関する調査研究—報告書—』
- (7) 深田 淳 (1992) 「日本語教育におけるC A I の位置づけおよび役割」 『日本語教育』 78号 日本語教育学会 pp.42-53
- (8) 藤原雅憲 (1992) 「C A I 学習と授業過程の分析—文法学習を中心として—」 『日本語教育』 78号 日本語教育学会 pp.67-78
- (9) 凡人社 (1998) 『日本語教材リスト』 No.28
- (10) 水町伊佐男 (1991) 「日本語動詞活用練習のためのC A I プログラムの作成」 『広島大学教育学部紀要第2部』 第40号 広島大学教育学部 pp.239-246
- (11) ——— (1992) 「日本語C A I へのアプローチ」 『日本語教育』 78号 日本語教育学会 pp.31-41
- (12) 三輪諺二 (1998) 『オンデマンド・ネットワーク型日本語音声教育システム(JESSON/J)』 岩手大学工学部インターネット (miwa@cis.iwate.u.ac.jp)

教材

- (1) 『新日本語の基礎Ⅰ』 (1990) 海外技術者研修協会編 スリーエーネットワーク
- (2) 『新日本語の基礎Ⅱ』 (1993) 海外技術者研修協会編 スリーエーネットワーク
- (3) 『日本語 (にほんご・にっぽんご)』 (1985) 小出詞子著 開拓社
- (4) 『日本語初歩』 (1985) 鈴木忍、川瀬生郎著 凡人社
- (5) *A Course in Modern Japanese Vol.1,2* (1983) 名古屋大学日本語教育研究グループ編 名古屋大学出版会
- (6) 『日本語実践 (CD-ROM)』 (1994) 日立中部ソフトウェア編 日立中部ソフトウェア
- (7) *An Introduction to Modern Japanese* (1977) 水谷修、水谷信子著 ジ

注

¹ 市販されている日本語教育用の CAI 教材については草薙 (1992) にも紹介されている。しかし、現在市販されていないものも多い。

² 東京農工大学、深尾百合子氏から質問に対して、電子メールにて直接コメントを頂いた。

³ この引用は岩手大学工学部インターネットホームページからのものである。

⁴ 例) ローマ字解答: [oyog- (?) masuka] で () の中に [i] とキーボード入力し解答する。
ひらがな解答: [およ- (?) ますか] で () の中に画面上の8個のひらがな文字の中から正答 [ぎ] につけられた番号を入力し解答する。

⁵ 基本的活用の形として、5 段活用の a i u e o の形に相当するものと、te・ta の形をとりあげた。ない形・ます形・辞書形・命令形・意志形・て形・た形、の7種である。

⁶ 1 グループか2 グループかを判別する場合、「ます形」から判別する場合と「辞書形」から判別する場合がある。今回のソフトでは「ます形」から判別する方法をとった。

その理由としては以下の2つがあげられる。

① 日本語教育の大筋として最初に「ます形」を学習する機会が多い。辞書形は連体修飾の形として出てくるので、順序としては後になる。

② 辞書形からグループ分け・て形の導入をする場合は、辞書形そのものは覚えるしかない。「ます形」と「辞書形」の両方をルールなく覚えるのは学習者にとって負担が大きいと考える。

しかし、辞書形は基本となる重要な形であり、辞書を引く時に不可欠であるということ等から、辞書形からグループ分けをするという方法も多くとられているので、補習という形でこのソフトを利用する場合には、辞書形から、グループ分け、て形と進む方法も今後、平行して利用できるようにしたいと思っている。

⁷ 「e」の形として仮定形を選ぶこともできたが、今回のソフトは初級学習者向けなので、例文が複文になってしまう仮定形をさけ、命令形としてとりあげることにした。日常使用することは少ないが「e」の形を出すことによって a i u e o と体系的に構成されている活用形が理解しやすいと考えた。

Ⓐ 意志形という呼び名については、意向形等の言い方もあるが統一されていないのでこの教材では意志形と呼ぶことにした。

Ⓑ 全活用形というのは本教材で取り上げた形を指す。その他の活用形として、可能・受身・使役・尊敬・自発などもあるが、これらは基本の活用形を利用して行うことができ、また使い方・意味共により複雑になるので、今回の基本編では取り上げず、今後機会があれば、初中級編として取り上げたい。

(姫路獨協大学・神戸学院大学 非常勤講師)

資料

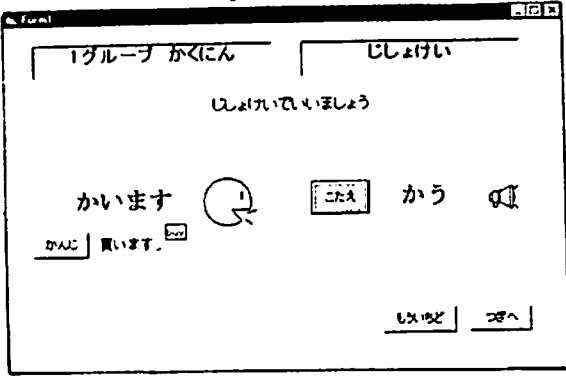
【画面A】

【画面B】

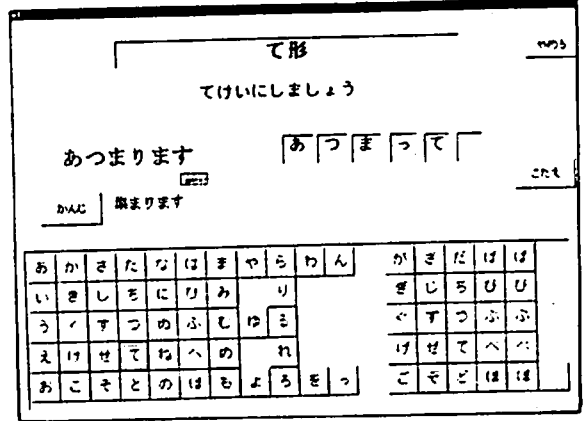
【画面C】

【画面D】

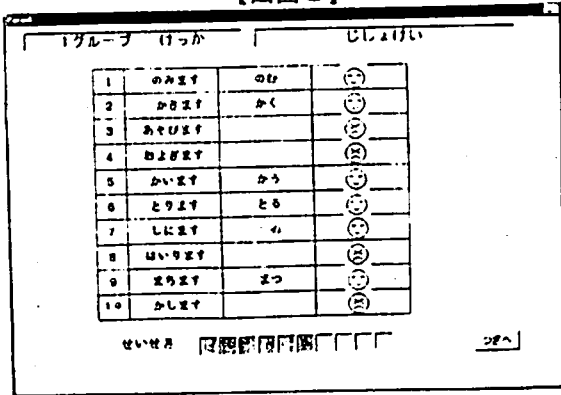
【画面E】



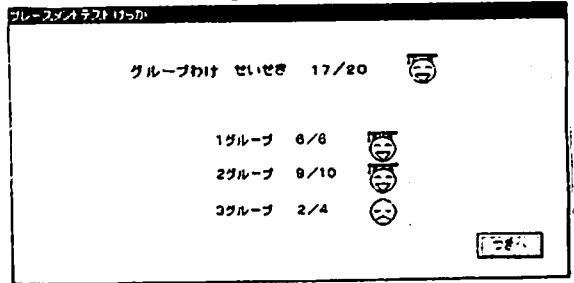
【画面F】



【画面G】



【画面H】



【画面I】

